

浄土

1986-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別授承認可誌) 第三二五号
昭和六十一年九月二十五日印刷 昭和六十一年十月一日発行
第五十二卷 十月号





十月の秀句

沓かけや秋日にのびる馬の顔

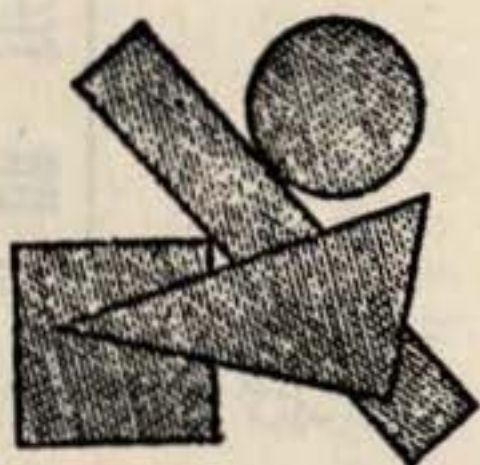
室生 犀生

秋の空わが身に夜の匂ひなく

飯田 龍太

曇日や花開かずに思ひ草

小田 芙美子



無量寿仏を見奉る者は、即ち十方
無量の諸仏を見奉る。

——『観無量寿経』真身観文

目 次

法 話

お十夜に想う……………長谷川 昌 光……(2)

「しつけ」の話……………曾 田 文 雄……(7)

＜連載＞ 一紙小消息 ⑮

少罪も犯さない……………村 瀬 秀 雄……(16)

み仏とともに =19=

——み仏の仲間たち——……………安 居 香 山 ……(22)

＜特別寄稿＞

芭蕉の「さび」の研究……………岡 本 薫……(12)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(十三)……………木 下 隆 一……(28)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第28回

風 含 む 山 陵

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「秋 明 菊」 松浦春子 画

お十夜に想う



十月になると各寺院ではお十夜の法要が始まる。そしてこの「お十夜」の声を聞くと、実りの秋の訪れを感じる。この時期、二十年程前は、私の住いのまわりでは稲穂が波うち

はせがわしょうこう
長谷川昌光

(横浜市光安寺住職)

農家の庭先には柿が熟し、実りの秋そのものが目に飛び込んできた。経済の高度成長のもと田畑は次第に市街地化されていき、実りの秋の訪れを目で確かめ、肌で感じる機会は少

なつた昨今である。それだけに、各種の年中行事は季節を告げてくれる大きな役割りを果たすようになってきている。

私にとってお十夜は、まさに深まりゆく秋と共に子供の頃の思い出をなつかしく運んできてくれる。

十夜法要は明応四年（一四九五）後土御門天皇の勅旨のもと、観音祐崇上人によって大本山鎌倉光明寺で行われるようになり、その後、全国の浄土宗寺院で勤められるようになったものである。

大変ありがたいことに、私はこの由緒ある大本山鎌倉光明寺の十夜法要が「お十夜」との出会いとなった。小学校五年の時父が急死した私は、当時は確か中学生以上を対象として開かれていた教区の夏期僧堂に入れてもらい、これが縁となって三年間程、光明寺十夜法要の伴僧を勤めさせていただいたのであ

る。十月十二日の開白から十五日の成満までの四日間、教区内各地からの参詣者で山内はにぎわい、双盤念仏やご詠歌の奉納が夜遅くまで行なわれていた。また、参詣者を相手に多くの露店が山内はもとより、付近の路上まであふれ、境内には数軒の見世物小屋も設けられていた。

小僧の私にとって、一日三回の法要とその間に勤められる施餓鬼会は永くて退屈な時間であった。昇殿の際、表面上はうやうやしく座具や香合を持って、御法主台下の後に従ってはいたものの、心はいつもこの法要が終わったら今度はあの店に行ってみようと決めていたものであった。何よりうれしかったことは、法要が終わり衣を脱ぎ捨て、白衣のまま飛び出して行くと、見世物小屋では本山の小僧さんということでフリーパスで入れてくれることであつた。「また来たの」と迎えられ、「おじさん今何時？」と次の法要の時間を気にしながら、何回も同じ出し物を見たもので

あった。

今、当時のことをあらためて思い起こしてみると、お十夜法要のあい間に縁日で遊んだというより、縁日で遊ぶあい間に法要に出たという主客転倒の四日間であつたような気がする。こうした思い出をもとに、「お十夜」は私にとって今も最も親しみのある行事となつてゐる。

十夜法要のいわれは、無量寿経に説く、「この娑婆世界で善事を十日十夜する功德は、仏様の国で善事を千年する功德よりも勝れてゐる」との文に起因するものである。仏様の国では善をなすものは多く、又善をなすようにできていて、悪事をしようとしてもできない。これに対して私たちの住む娑婆世界は悪事が多く、悪をなすように仕組まれ、互いに苦しみ、欺き、身も心も悩み通し、苦を飲み毒を食つてゐるようなものである。この悪の

多い世界で善を行うことはむずかしく、従つてこの悪の世界で善を行う功德は、善の行いやすい国で善を行う功德よりも勝れており、その程度は十日十夜と千年との対比であるというわけである。

ところで、善を修めるといふことであるが、善を修めるには、何が善であるかを考えてみなければならぬ。善とは何か？——これはなかなか大きな課題であり、種々の定義のしかたがあると思う。善とは、今こうして生かさせていただいてゐる「おかげさま」の存在であることを確かめ、お念仏によって心の奥底に秘んでゐる仏性を育てはぐくみ、確かなものにしていくことではないかと私は思つてゐる。

私はこの三月まで二十年余、教員生活を送つた。先日二十七歳になる卒業生のクラス会に出席する機会があつた。当日は二十名程の

出席者であったが、在学当時の思い出話し、各自の仕事のこと、夫のこと、妻のこと、子供のことなど話題にこと欠くことなく時間が経過していった。私は一人一人の話を聞きながら往時をなつかしく思うとともに、たくましく成長している教え子の姿を見て心楽しい時間を過した。会も終り近くなってM君が隣りに来て、近況を話したあと、

「先生、僕は最近になって、おやじは偉いなあと、尊敬するようになりました」

と言い出した。彼は米屋さんの二男坊で、長男はサラリーマンになり家業はM君が継ぐことになっていた。私が接した中学校時代の彼は野球部に入り、学業、スポーツともに熱心な生徒であった。家業を継ぐべく名門の商業高校に学び今日に至ったわけである。高校入学後の彼は、学業もそこそこにエレキギターに熱中し、ロングヘアの異様な格好をし、両親にも反抗的な言動をとることも多々あったようである。こうした時彼の父親はある時は

厳しく、またある時はじっと見まもっていてくれたというのである。彼も今は一女の父親、子育てはまだ始めたばかりであるが、子を持つて知る親の恩、自分の成長の過程を振り返って見た時、親の大きさに気付いてきた彼である。

「先生、本当に今父親の偉大さを感じています。今日の僕があるのは父親のおかげだと感謝しています」

「ところで先生、僕が感謝している気持、尊敬していることを何とか伝えたいと思っているのですが、どうしたらいいでしょうか。少々照れくさい気がしてなかなかいい出すチャンスがないんですが……」

というのである。私は、

「言葉で伝える必要はないでしょう。今のままでいいですよ。君がいつのころか知らないけれど、そのような気持になった時点でお父様はちゃんと解っていますよ」と答えてやった。

「先生、僕はそれでは何か気がすまないんです。今のうちに僕の気持ちを伝えておかないと、僕が尊敬していることを知らないままに死んでしまうことだってあるわけですから……」

父親は今の彼の気持ちに気付かないことは絶対でない。言葉で伝えることよりも、今のその気持ちを今後ずっと持ち続けて、父親に接することの方が大切であることを私は強調した。人の心は知らず知らずのうちに言動となつて表に出てくるもの、彼の気持は父親に伝わっていくものであることを私は繰り返した。M君は少し安心したようにやがて友人との話に入っていた。

私は若者から「おかげさま」の言葉、しかも口先だけのものでなく、心の底からの「おかげさま」を聞いて、大変すがすがしい思いをした。彼のこれからの生活にはまだまだ幾多の波乱があると思うが、今の心情をいつまでも忘れることなく精進して欲しいと願つて

いる。

私たちの日常生活はお互い生業（なりわい）に追われることが多く、自らの顧みる余裕がない。しかし、心静かに自分の存在を考えてみると、私たちは地球上に多くのいのちがあるなかで、受け難き人身を受け、会い難き如来様の大慈大悲にまもられ、また社会の多くの人々の力によって生かさせていただいていることを思う時、心から「おかげさま」と感謝の念を起さずにはいられない。

お十夜を機会として「おかげさま」の存在であることをあらためて認識し、お念仏のもとに報恩感謝と、自らの心も、昨年よりは今年、今年よりは来年と、実りの秋を迎えられるよう精進する心を育てていききたいと思っている。

「しつけの話」

曾^そ田^だ文^{ふみ}雄^お

(広島文教女子大学教授)



一

「しつけ」ということばがあります。「親のしつけが行き届いていない」とか「あの家庭のしつけは厳しい」という風に用いられることばのことです。そして、その意味するところといえば、「礼儀作法を身につけさせること」あるいは「身にそなわった礼儀作法」ということになります。

右を仏教の立場からするならば、「如法」ということにも繋がりがあるのではないかと考えられます。

いまは、この「しつけ」について、例えば子供に対して如何なる方法でしつけたらよいのか、といった、手段について御話するのではなく、わが国で、この「しつけ」がどんな具合にして広まっていったか、という面からのことを御話してみたいと思います。

二

この「しつけ」なることば、今日、しばしば口にされるところです。ということは、それほどに、「しつけ」ということが必要とされ、大切なことと考えられている証拠とも申

せましょう。

決して文部省の御先棒をかつぐつもりはございませんが、確かに、この「しつけ」ということは、問題として採り上げられるだけの価値があるように存じます。

何が故に、われわれには「しつけ」というものが必要なのか、ということに関しては、後で触れることに致します。

はじめのところで、例に挙げました「親のしつけ云々」のことは、受身の立場にある子供ばかりか、むしろ親自身にも問題があるように思います。

今日只今、人の親となって子供を育て、あれやこれやを教えつつある人達が子供であった時期といえ、丁度、日本が戦争に負けた頃に当っております。当時は、日本人全体が総白痴と呼ばれた程に、打ちのめされ、生活に自信を失っていた時であって、正にその頃、生まれ、あるいは少年期を迎えようとしていた人達が大勢をなしております。

そういう時期に、自信を失っていた親が仕込んだ「しつけ」だったわけですから、戦前のそれと比べたら、決して十分なものではなかったこと、致し方のないことで、誰れの責任、と追究するわけにもいきません。

日々を生き延びる為、食糧調達に追われるばかりであっては、子供の教育どころではなく、子供への「しつけ」など、全く二の次とされていたのが、あの頃の世相でした。

一時期盛んだった学園紛争の如き、その申し子ともいえましょうか。昭和四十年代前半の当時、近畿地方の国立大学で教壇に立っていた筆者のわたくしも、その紛争に巻き込まれ、学生から反対に戦前の教育を批判され、教育勅語の効果について問い糺されたりした経験を持ち合わせております。

外からは、至極立派な「しつけ」が行き亘っていいような家庭のように見えながら、その実、とんでもない生活ぶりの一面をさらけ出したりすることだってあります。

作文が授業参観での時間に充てられた折、かねてから評判の、美々しく着飾ってすまし込んでいる奥さんの子供が当てられ、「うちのお母さんは、台所にいる時、お茶を薬缶から口うつしで飲みます」と読み上げるや、真赤になって、文字通り穴にでも入りたそうな素振りを見せていた例を存じております。

子供というものは、親の行動をつぶさに観察しているものです。ですから、右のような人達が集まって、PTAの会合を開き、子供達をしつける方法などのことで、どんなに熱弁をふるおうとも、空論だおれの結末に至ったりすることが多くはないでしょうか。現実と理想とがかけ離れていては、如何に立派な説が出されようとも、子供がついて行けるものでなくては何にもなりませんまい。

三

その「しつけ」ということばに対しては、漢字で「𪛗」の字を充てます。この場合、そ

の「𪛗」は、中国の書物には見当たらない文字です。勿論、経卷の中からも拾うことが叶いません。それは、日本で作られた文字、すなわち国字であるからです。

「しつけ」の漢字については、「𪛗」の他にまだ、身扁に花を書いた文字もありました。しかし、こちらは、「𪛗」ほどに文字としての寿命が長くなくて、間もなく忘れられてしまいました。

いずれにせよ、斯様に、身扁に「美」とか「花」とかを充てた、ということ、それらの文字を作り出した人々の気持が奈辺に存したか、ということを告げて余りあるように思うことです。

また、この「しつけ」ということばは、それ自体、さ程古い成立とは思えず、奈良時代はいう迄もないこと、平安時代でも、例えば『源氏物語』を代表とする仮名文学作品の類からは一つも見出すことができません。

手許にある書物を見る限りでは、室町末

期、十六世紀の初め頃まとめられたと考えられる『文明本節用集』という辞書に載っている例が古いところのようです。

奈良から平安時代にかけては公卿の時代、それに対して室町時代というのは、公卿とは別な、武士を仲介にして、いわゆる庶民が抬頭してくる時代であります。

右に申しました通りで、平安時代には「しつけ」ということばが見当らず、室町も終り近くになって姿を見せはじめ、ということを考え合わせるなら、この「しつけ」ということは、公卿達には無縁の、否、口にする必要のないことばであった、いい換えるなら、「しつけ」の如き、公卿の世界では、事新らしくいい立てるまでもない内容のことであつた、と解されるか、と思います。

「しつけ」とは、庶民が使い出したことばであつて、それも文献に見る限り、用例の殆んどが会話の中ばかり出て参ります。だから、文章語としてでなく、むしろ、日常の会

話内で交わされる、身近かなことばであつたらしいのです。したがって、公卿のような、宮廷を中心に生活していた人達にとっては当り前の「しつけ」なるものが、庶民にとっては、次第に生活の場を拡げていく上からは、どうしても必要となってきたものの一つであつた、ということになります。

「しつけ」、それはこの際「礼儀作法」ということばに置き換えた方が分り易いかも知れませんが、そういう「礼儀・礼節」というものが段々庶民間に浸透していく頃に使用されはじめた、ということにもなりましょう。

四

ではどうして、このような「しつけ」が庶民層にまで必要となってきたのか、といえ、いろいろ理由は挙げられましょうが、筆者はここに、集団生活、という要素を当嵌めてみたくなります。集団生活を送る上から、「しつけ」は、乃至「礼儀作法」というもの

は、極めて大切な条件となるべきものであった、と考えます。

公卿なるもの、それらは天皇を中心とした集団の生活圏を作っておりました。

それが、武士が公卿の手を離れ、集団としてまとまり始めたことでもって、そこに秩序ということが強く意識されるようになり、揚句に礼儀作法が干要と考えられるに至ったのです。

次いでは庶民も、市や座を中心^いに集まりを見せ、城下町の如き大集落が出来たりしながら、集団生活へと移っていったわけでしたが、そうなってくれば、当然そこには秩序が生まれ、それ迄は個人々々が勝手に行動し得ていたものが、協調しながらの生活へと転じなければならなくなり、「きまり」が必要となるにつれて、これ迄公卿間にだけ存していた礼儀作法が重んじられるようになったもの、と思います。

故に、この「しつけ」というものは、庶民

が公卿の風習を自分達の側に採り入れた、ということであるなら、せんじつめれば、公卿間に行われてきた生活を基準とし、その世界に範を仰ぐ、ということであつたか、とも考えられます。

指導者を選び出す、乃至は、まとめ役を設けるなどの操作を施しつつ、社会秩序を打立てていこうとしている際、もしかしたら、連歌師の如き、高級貴族とさえも接触することが可能であつた庶民が一部にいたことを加味すれば、公卿世界だけに存していた礼儀作法なるものが庶民の手に渡る上で、案外容易な道が開けていたことも想像できます。

以上から推測するに、室町前後に庶民の意識内に高まってきた「しつけ」というものは、公卿のそれと極めて類似したもの、時にはそっくり拝借した場合だってあり得たことでしょう。たとえ生活様式・風俗習慣を異にしていようとも、同じ日本人の間で創られたものであつたわけですから。

△特別寄稿▽

芭蕉の「さび」の研究



芭蕉の禅修業

芭蕉の句趣の特色は、「さび」にあると言われている。辞書には、「さび」を説明してこう記してある。

「中世の幽玄から発展し芭蕉の俳諧に至って完成された日本文学の基本的理念の一つ。閑寂でうるおいのある美が実に匂い出ているような趣をいう」。

これだけでは分ったようでは分らないから、

岡本 薫
おかもと かおる

(光明学園理事長)

今少し解説を試みたいと思う。

そのためには、芭蕉の「悟(さとり)」について記さなければならぬ。

古池や蛙飛び込む水の音

この句がよく引き合いに出され、しかもこの句を作ってから悟が開けたと、いう人が少くないが、それは誤まりである。彼の悟はこの句を作る前から開けていたのである。彼は

禪の修行をしたが、その師匠は仏頂和尚で、和尚は芭蕉庵を訪ねた時、次の禪問答によって、芭蕉の悟境を試した。

仏頂 近日、何事がある

芭蕉 雨過ぎて青苔を洗う

仏頂 いかなるかこれ青未生以前の仏法

この時、池辺の蛙、一躍して水に入る。その音に応じて、

芭蕉 蛙飛びこむ水の音

仏頂 珍重、珍重

「古池や」はあとでつけた冠句。

現象界を内観すれば真空平等の心霊界である。この心霊界を法身といい、法身は無相であるが、現象界を産出する大勢力をもっている。「青苔未生以前の仏法」とは法身のことである。坐禅して法身にめざめると肉体へ執

着した「小我」をはなれて「大我」の自己となる。これこそが真実の自己で、時間的に言えば永遠の生命である。ここを「涅槃寂静」という。

「水の音」は単なる物質的な音ではなく、大我にめざめた芭蕉の心の感覚である。音ブラス心である。この理は音だけではなく、感覚のすべてに通ずる。「松の色」「花の香」と答えても悟を証明したことになる。

悟から生れた四種の美

「悟」には狭広の両義がある。狭い意味では、知的な悟のことである。即ち「小我」はにせものの自己で、「大我」が真実の自己であると認識することが知的な悟である。知的な悟を寂光土という。広義の悟には、感覚の浄化された清浄な世界、即ち浄土と、感情の浄化された極楽と、意志の浄化された絶対善の境地であるところの無為涅槃が包含される。

芭蕉の句を広義の悟に照らして解説して見

よう。

(一) 永遠の生命(大我)が得られたので、人生の無常が一層明確に認識されて生れた無常句、及び精進の意欲を示す句。

やがて死ぬ気色も見えず蟬の声

夏草や兵どもが夢の跡

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

△精進の意欲を示す句▽

今日彼岸菩提の種をまく日かな

憂き我を寂しがらせよ閑古鳥

鎖開けて月さし入れよ浮御堂

(二) 禅の修行により感覚が浄化され、自然が一層きれいに見えて出来た句。

あらとうと青葉若葉の日の光

白露をこぼさぬ萩のうなりかな

あけぼのはまだ紫にほととぎす

山路来て何やらゆかしすみれ草

荒海や佐渡によこたう天の川

(三) 禅の修行により煩悩特に瞋(いかり、不平不満)が浄化されて、世の苦楽を越えた絶対楽(極楽)を得て出来た句。

粟稗に貧しくもあらず草の庵

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

蚤しらみ馬の尿する枕元

雲雀より上に休ろう峠かな

涼しさを我が宿にしてねまるなり

(四) 普通の善悪を越えた絶対善の立場から生れた句。善には智慧(正義)と慈悲(仁愛)の二面がある。笑う場合、智慧的笑(風刺)と慈悲的笑(ユーモア)の二種がある。

一つ家に遊女も寝たり萩と月(智慧のわきまえ)

この道や行く人なしに秋の暮(蕉風)

道ばたのむくげは馬に食われけり(慈悲)

箱根こす人もあるらし今朝の雪(慈悲)

よく見ればなずな花咲く垣根かな（慈悲）

我事とどじょうの逃げし根芹かな（ユーモア）

はたる見や船頭酔いておぼつかな（風刺）

立体美と平面美

以上の研究から、「さび」とはどういうことかという、だいたいの概念が出てくる。一言でいうならば、悟を得た心で現象界を見た場合の情感といえるだろう。故に「さび」は、聖プラス俗であるから、仏道修業は絶対の条件ということになる。

芭蕉の場合は、聖（悟）なる価値を俗生活の上に現わした詩趣、これが「さび」ということになる。知的には無常美と精進美、感覚的には清浄美、感情的には苦楽超越美、意志的には智慧美、この四種の美が「さび」としての美であるから、「さび」とか「閑寂」とか、一言で言い現わすことは出来ない。強いというならば悟の眼で見た美、即ち「悟眼

美」とでもいうべきか。又、聖と俗の総合美であるから、立体美と言ってよいだろう。

蕪村の句は、平面美が特色のように思われる。蕪村も剃髪はしているが、悟はそう深いものではなかったようである。彼は絵をも学んだので、その美は絵画的、平面的である。きれいではあるが、深味に乏しい。

菜の花や月は東に日は西に

山は暮れて野は黄昏の薄かな

五月雨や大河を前に家二軒

春の海ひねもすのたりのたりかな

蕪村は「俗を用いながら俗を離れる」ことを目標としたが、これは普通の詩歌がみなそうである。芭蕉の場合は「悟の眼をもって俗を見る」ということになる。故に立体的であり、深味のある美となる。

少罪も犯さない

村瀬秀雄



「罪は十惡五逆の者も生ると信じて少罪をも犯さじと思べし。罪人なをむまる。況んや善人をや」

因果応報はこの世の原則として必ず行われるからこそ、諸仏は惡をやめて美を修めるようにと試しめ給うているのである。しかし仏法を聞く機会がなくて罪を犯す人も多い。經典は次のように説く。

「下品下生というのは重罪を犯した凡夫の往生である。この者は甚だしく愚かであって五逆十惡という最も重い罪を犯し、またその他にもいろいろの惡行を行ったのである。この愚人は犯した惡行の報いによって、まさしく無間地獄におちて永遠に救われることがなく言語に絶する苦痛を受けなければならぬ筈である」(觀無量壽經)

もし地獄におちれば言語に絶する責苦を受

けねばならない。經典は次のように説く。

「地獄の苦しみがいかに酷しいかは、ものに喩えて説くことができない。何故なら地獄の眞苦を十分に説明することは誰にもできないし、その様相を詳しく聞いていることもできない。もし地獄で受ける苦痛を十分に説くことが出来る者があって、その話を聞く人があったとすれば、その人は恐らく血を吐いて死んでしまふに相違ない」(正法念処經)

しかしこの愚人は命終の時に仏法を説く善友にあらうことができて、十念を唱えることがつけた。經典は続いて次のように説く。

「愚人は善友が勧める言葉に従って、真心をこめて南無阿彌陀仏と声を絶やさずに唱え続け、十声だけ南無阿彌陀仏と唱えることができた。念仏を唱えることによって得られる功德は、念仏の一声一声ごとに限りなく遠い昔から今に至るまでの生死の罪が除がれるのである」(觀無量壽經)

このように五逆十惡を犯した極惡人も十念

を唱えた功德によって罪が除かれ、命終とともに金色の蓮華台に乗って極樂往生できたのである。念仏を唱えれば罪が除かれるということと濁り水を清浄にする淨摩尼珠の力に喩えている。曇鸞は次のように説いた。

「例えば淨摩尼珠を濁った水の中に投げ入れると、水はたちまち澄んで清い水になるようなものである。果てしなく続けてきた生死の罪という濁りがあっても、生滅變化することがない清浄な宝珠である阿彌陀仏という御名の功德を聞いて、その宝珠を濁った心の中に投げ入れれば、その一声一声の念仏によって罪が滅せられ、心が清くなつて極樂往生できるのである」(往生論註)

ある人が法然上人に問うていった。

「世間をのがれて隠遁している人が一筋に念仏を唱えていれば、その人はたしかに往生できることでしょうか。ところが私たちのように朝に夕に営むことは名聞のことであり、昨日も今日も考えているのは利養のことばかりの

者がいます。このように暮している者が念仏を唱えていても、どうして仏のみ心に叶うことができませんでしたか」

上人は答えていった。

「浄摩尼珠という宝珠を濁っている水の中に投げ入れると、珠の功用によってその水が清くなるようなものである。人の心がいつも名誉や利益を求めていることは濁った水と同じことであるが、その中に念仏という浄摩尼珠を投げ入れれば、心の水は自然に清くなるから往生できる。これは念仏の功德の力なのである。まず初めに心を静めて障りを除いてから念仏を唱えよということではない。ただ常に念仏を唱えていて、心の濁りも障りもなくして罪を滅するようにするのである」(十二箇条問答)

ある人が仏の慈悲で善人と悪人とを区別し給わぬことを、上人に問うていった。

「仏の本願は悪人を見捨て給うことがないのですから、平気で悪業をつくっていても往生

できるのでしょうか」

上人は答えていった。

「仏は悪人でも見捨て給うことがないからといって、好んで悪事を行うような者は仏の弟子ではない。仏のどのような教えがあっても悪を禁じない法はないのである。悪いことをしないように心掛けていても、つい犯してしまった場合に念仏を唱えて罪の報いを滅するようにと勸めているのである。わが身は悪をやめられないからといって、仏に罪を滅し給えと願うことは大きな誤りである。自分ではどうしても悪を止めることができなかった場合にだけ、仏の慈悲に縋って捨て給わぬように願い、その罪を滅して命終に迎え給えと願うのである」(同上)

またある人が上人に問うていった。

「凡夫の心はいつも悪いことばかりを考えています。それを外に現わさないのは人目を憚っているからであって、仏に恥じているというわけではありません。それなら心の向くまま

に振った方がよいのでないでしょうか」

上人は答えていった。

「他人から尊ばれたいと思って外見ばかり飾っているのは、たしかに悪いことであらう。

しかし悪いことをしないために、たとえ心中で思っている外にまで現わすまいと思つて心を押えているのは、つまり仏に恥じる心なのである。何はともあれ悪いことをしないように努めていながら、念仏の功德を積まなくてはならない」(同上)

念仏の法門は他力の易行道である。それを勘違いして、思ひのかかに悪事を行つても構わないと考える者がいた。上人はこのような者を酷しく戒しめ、次のように説いた。

「罪をつくらぬように身を慎しみ、善人になろうと努める者は阿弥陀仏の本願を軽視するものであるといったり、念仏の数を多くするために毎日の念仏を数多く唱えるのは他力本願を疑っているとかいう者が数多くいるとのことである。このような誤った考えを決して

聞き入れてはならない。經典のどこに阿弥陀仏が罪をつくるように勧め給うているというのであろうか。このように説く使はがが身の悪がやめられず、罪ばかりつくっているために途方もない虚言を考え出したのである。このような誤った考えは何も知らない男女を歎き、かつ悔蔑する者である。他人に罪をつくるように勧め、煩惱を起させようとするのは天魔の所業であり、異端者の邪教である。極樂往生を願っている者にとっては仇敵であるといわねばならない」(念仏行者訓条)

どのような悪人でも念仏を唱えれば極樂往生できることは經典に説かれている通りであるから、まして行いを慎んで念仏を精進して唱えている者が往生できないわけがない。善導大師は次のように説いた。

「どのように罪深い凡夫であっても念仏を唱えれば、その罪業が減せられて極樂往生できるのである。まして聖人が往生したいと願つて念仏を唱えていれば、どうして往生できな

いことがあるか」(観念法門)

仏の慈悲は人の善惡を区別しなくても、惡人を見れば悲しみ、善人を見れば喜び給うのである。仏の教えはあくまで善人になるように努めていながら念仏を唱えることである。

法然上人は次のように説いた。

「念仏を唱えれば必ず極樂往生できる。だからといって惡の報いを憚ることなく、施すべき慈悲を行わず、念仏を唱えるのに勵まないのは仏の教えの掟に背くものである。たとえば父母の慈悲は美に子も悪い子も同じように育ててゆくが、美しい子であれば善び、悪い子であれば嘆くようなものである。仏はすべての人々を憐んで善人でも惡人でも同じように往生させるのであるが、善人を見れば善び、惡人を見れば悲しみ給うのである。それは恰も肥えた土地であつても、よい種を選んで蒔くようなものである。必ず善人になるように努めていながら、その上で念仏を唱えていくてはならない。このようにしてこそ眞実に

仏の教えに従っているといえるのである」

(念仏往生義)

仏の慈悲は罪を憎みながらも人を捨て給うことがない。親は過ちを犯した子供を慰めるが、犯した罪を戒しめるのである。証賢は次のようにいった。

「法然上人は十惡五逆を犯した者でも往生できることを信ずるやうにと仰せられている。

これは仏は罪を憎みながらも人を見捨て給わぬ御心を知るといふことである。続いて上人は僅かな罪でも犯さぬやうに心掛けるやうに仰せられている。これは仏は人を見捨てることがなくても罪を憎み給うのであるから、身を慎しむやうにとの意味である。憎みながら見捨て給わぬのが仏の御心であると知つたならば、重罪を犯した者でも念仏を唱えれば往生できることに疑いが無い。見捨てることなくとも憎み給う仏の御心を知つて、罪を恐れて身を慎んでいれば、僅かな罪を犯してしまつた者が往生できないわけがないというの

である。このような道理を聞くにつけても、
仏の本願がますます頼もしくなる。

もし仏が罪を憎んで罪を犯した者は決して
往生させないというならば、世に超えて勝れ
た慈悲の本願であるという甲斐がなくなるの
であるまいか。もしそうなればわれ等凡夫は
何を頼みにしたらよいのであろうか。仏が見
捨て給わぬからといって、罪を恐れずに身を
慎しなかつたならば、余りにも不都合極ま
る心掛けといわねばなるまい。仏の慈悲に甘
えて罪を恐れないという誤った考えを持つ者
があつたとすれば、仏といえども疎ましく思
し召し給うに相違ない。だからといって罪を
ことごとく犯してはならぬというのも、これ
また酷しすぎてわれ等凡夫にはできないこと
である」(帰命本願鈔)

熊谷次郎直実は建久三年(一一九三)に自ら
髪をおろして蓮生と名乗った。聖覚に來世の
果報について教えを乞うた。すると聖覚は左
様なことは法然上人に尋ねた方がよいと教え

た。そこで蓮生は上人の庵室を訪れて教えを
求めた。上人はいった。

「罪の重い軽いを問題にせず、ただ念仏さ
え唱えれば極樂往生できるのである。その外
に別の子細はない」(勅修御伝第二十七)

すると蓮生はいきなり涙を流して泣きだし
てしまった。上人は何んのことか判らずに黙
って見ていた。しばらくして上人は何んで泣
くのかと尋ねた。蓮生は答えていった。

「手足を切ったら、命を捨てる位の覚悟で修
行すれば、あるいは後生は助かるかも知れな
いと承るものと覚悟していました。それなの
にただ念仏さえ唱えれば極樂往生できると易
々と仰せられたお言葉が余りにも嬉しく、思
わず泣いてしまいました」

上人は蓮生が心から深く後世を恐れている
者であると思つて、続いて教えた。

「たとえ無知の罪人であっても念仏を唱えれ
ば極樂往生できるとというのが、阿弥陀仏の本
願の正しい意味なのである」(同上)(つづく)

み仏とともに

=19=

—み仏の仲間たち—



やす い こう ざん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

終戦を迎え、私は焼け野が原となった沼津の師籍で、師匠の家族達と食生活の苦難と闘った。或る時は、自転車でカボチャの買い出しにでかけ、或る時は滋賀の実家まで米をもらいに行った。焼け跡の寺の境内に、じゃが芋や枝豆なども植えた。枝豆など枝は大きくなり、葉はしげるが、一向に豆がならなかった。素人の悲しさというべきであろうか。

或る日、カボチャを一杯買い、布呂敷に包んで自転車の荷台に乗せて帰る途中、街の中心通りでバランスを失い、ひっくり返ったことがあった。カボチャはころげるし、自転車は重くて起せない。人通りの多い中で、真赤な顔になりながら苦勞したことを、今でも忘れない。幸い誰かが助けてくれて、無事帰ってきたが、戦後の思い出の一つである。

こうした生活の中で、唯食うことだけがすべてのような毎日の生活にうんざりしていた私は、友人達と語り合っ
て「何かしようではないか」と相談をした。そして思
いついたのが、レコードコンサートであった。当時、沼
津市は全焼して、街はほったて小屋のような家並が建っ
ていた。しかし街の中心にある三階建てほどの商工会議

所は、鉄筋であつたため、焼け残っていた。そこには三百人程入れるホールもあつた。そして、時に講演会なども行われていた。

私達は市と交渉して、これを安く借りることができた。或る友人は、焼け残ったレコードを、たくさん持っている人を知っていた。又或る友人は、電気屋と親しく、電蓄を借りる交渉をした。当初は五、六人の友人の集りでこうした計画をすすめ、藁半紙のポスターを書いて、電柱などにはって歩いた。ところがどうであらうか。文化にうえ、音楽に枯渇していた人々が集り、ホールは一杯になった。壇上に電蓄を置いただけの会場ではあつたが、このコンサートは、沼津の文化運動のはしりとして、大いに喜ばれた。

始めは男友達だけでやっていたが、次第に女子会員も参加するようになり、三十名近い会員となり、会の名も濤香会とつけた。千本松原の海岸に打ち寄せる波と、市の北にある香説山の名をとってつけたものであつた。そして、寺の仮本堂を使って、坐談会をやったり、会報のガリ版刷りを造ったりした。私の男友達の多くは沼津中学の同窓で、学徒出陣した連中が多かつた。それ故、考

えようによつては、復員軍人の集りのようでもあつた。

そんなこともあつてか、マッカーサー司令部から、代表者の私宛に、会の機構、構成員、事業、会報等を送るよう命令があつた。これにはいささか驚いたが、別に悪いことをしているわけでもないので、堂々と報告をした。それ以後、会報を送る程度で別に何事もなかつた。会もレコードコンサートを軸として、いろいろの企画をしながら、青年文化団体のようなものになつていった。会員中には恋愛するものなどもでてきて、花やいだものになつた。

この会は、十年程続いたであらうか。私が文理科大学に入り、東京に下宿してしまふようになるまで、私の師籍の乗運寺を拠点として、活動が続いた。その内に、友人達も就職し、或いは東京に行くものなどもでてきて、レコードコンサートはできなくなり、自然休会のような形になつた。それでも時に思い出したように、集つては、時勢を論じ、日本文化のこれからを語りあつた。本とてもなく、文化の乏しいこの時期にあつて、私にとつてはこの会はオアシスのようなものであつた。青年男女の交流ということも、新しい時代の友情を分かちあ

うよい機会であった。まさにそれは、終戦後の荒廃の中での、得難いみ仏たちの集りであった。

私は、この会を通じて、多くの友人と知り合うことができた。大体、同じ程度の年齢の人びとの集りであったので、その頃の友人達は、もう六十前後になっている。

その中には、市の助役になり、次は市長と言われていた金子君がいたが、忽然と死んでしまった。少し先輩に当る井手さんも会員の一人であったが、後に市長として何期か市政を運営された。壽香会には、そんな人もいた。未だに文通しあって、旧情を温めている。短い人生にあってこうした友情は得難いものである。

○

東京での下宿生活は、昭和二十五、六年頃からであるか。始めは沼津から文理科大学に通い、一泊か二泊して沼津に帰るといような生活を繰り返しながら、勉強した。上京した折の宿泊先は、真野龍海君の下宿で、彼の布団にもぐり込んで寝させてもらった。まさに同衾の親友となったわけである。その内に、真野君が他に下宿を移ることになり、その後を譲ってもらって、下宿する

ことにした。東京生活は、ここから始まったわけである。荻原貴光弁護士先生の近くであったのを幸い、しばしば出掛けて栄養をとらせてもらった。私の念仏堂である貴光寺ができるようになる宿縁は、このようにしてできたわけである。

私の専門は、中国哲学で、その頃は儒家、道家を中心とした「道」の哲学と言ったものを中心として、研究していた。その頃、日本中国学会が誕生し、その創立にも文理科大学から派遣されてお手伝いした。理事長であった加藤常賢博士（当時、東大主任教授）に親しく教示を受けられるようになったのも、そうしたご縁からであった。

日本中国学会では、毎年一回全国大会を開くことになり、第一回を東京、学士会館で、第二回を京都大学で、そして第三回を慶応大学でやった。その頃私は大学の助手として、大会の受け付け等を手伝った。そんなこともあって、東京の各大学の助手連が受け付けで仕事をし、互いに親しくなる機会があった。そして誰いとなしに、

「これを機会に、助手同志の勉強会を持っては」



——土曜談話会、昭和33年、於幡随院
前列の右はしが筆者——

ということになり、早速にその準備会を湯島の聖堂で開いた。昭和二十六年の暮の事であった。会の名も土曜談話会と名付けられ、毎月第二土曜に研究会を持つことになり、私とその世話係りをするようになった。

これは瀟香会と違い、学問研究を中心としたもので、各大学の助手連が集っての討論は厳しいものであった。それだけに学問的にも、大いに啓発された。やがて、単なる討論会や、研究発表だけでは勿体ないということになり、『四庫全書総目提要』の訳註を作ることになり、経子史集にわたって、各人の専門のものを選び、これを訳註して皆の批判を受けるという研究をやった。春夏には二、三日の合宿をして、朝から夜にかけてやるという物すごさで、これには皆相当に鍛えられた。

会員も四十人近くになり、東京六大学を始め公私立の中国哲学・文学の同年輩の研究者が集った。世話係りをしていた私は、いつの間にか理事長と呼ばれるようになり、案内や、会の運営に当った。そしてこの会は、今尚続いているのであるから、己に創立以来三十五年にもなろうとしている。そして、当時の助手クラスの人びとも

殆んど各大学の教授となり、日本中国学会の中樞となつてしまった。いま学会の理事長は山井湧君（元東大教授、現大東大教授）で、私も理事の一人となっているが、関東の理事、評議員は殆んど土曜談話会々員というような時もあった。

この会は、私の学問研究に大きく寄与すると共に、いろいろな意味で有益な会であつた。何処の大学に行っても知己が居り、図書がみられ、時には講師として招聘もされた。私が専門の緯書を、東大で数年にわたつて講義できたのも、こうした縁があづかつて力があつた。お茶の水女子大学、名古屋大学、大阪大学などに出講したのも、こうした会員たちが全国の大学に散らばつて行ったことにもよつた。緯書という特殊な研究であつたことも、そうした機会を与えられた理由であつたが、それ以上に、人の繋がり**の強さがここにあつた。**

私を取り巻くみ仏たちには、こうした仏教関係以外の人びともあつた。そしてその中には、家族ぐるみで付き合っている人も幾人かいる。浄土宗の同人でつくつていた法然学会のようなみ仏達のグループも、いろいろと教えられるところは多かつたが、仏教以外のいわゆる外道

の学をやっている私にとっては、この土曜談話会はかけがえのないものであつて、生涯とも続けていきたいと考えている。「会員が死に絶えることによつてなくなる会である」と皆でいいあつてゐるが、どうやらそんな会であるに間違いなさそうである。

（つづく）

Ⅱ新刊Ⅱ

竹中 信常著

『宗教的体験と人格』

A5判 上製函人 三九五ページ

定価 九五〇〇円

△発売▽

山喜房仏書林

〒133 東京都文京区本郷五―二八―五

（振替）東京 〇―一九〇〇

昭和62年度版

浄土宝暦

—三上人遠忌慶讃記念号—

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和62年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

◎なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

.....お申込み.....

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会

(振替)東京8-82187

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（十三）

—洛陽（二）—



木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

（隨筆家）

二時間おきくらいに一度列車は停る。その都度一人二人と王さんに促されて、婦人からお齡の順に硬臥車に消えて行く。何度目かに停った西安で、大分乗客の入れ替えがあり、我々の残りの大半はここで硬臥車の座を占める事が出来た。

「西安より長安と言った方がピンとくる」

と私が言うと、G君が長安で何を思い出すかと尋ねた。

「そうだなあ、長安一片の月、万戸衣を擣つ^うの声……という李白の詩かなあ」

「それ、なんて言いましたっけ。土産物屋に必ずといっていいぐらい達筆の掛け軸が掛かっていたけど……」



——洛陽工芸館にて——

『子夜呉歌』、李白の」

テーブルに突っ伏して寝息をたてていた大学院生のM君がむっくりと頭をもたげると、それだけ言っただけでまた寝てしまった。

「いま言った事、覚えているかなあこの人。朝起きたら聞いてみようよ」

M君とは幼馴染の佐藤孝雄君は、そう言って笑った。

「体が大きくて、一見豪放磊落に見えるけど、意外にナイーブな面も持っているんですよ。ひょっとすると、旅行の前に秘かに『唐詩選』でも勉強したのかな」

列車は何の予告もなく発車すると、忽ち漆黒の闇に突入して行った。厚い雲が邪魔しているのか、車窓から見る限りでは、西安の空に一片の月はなかった。

「月は長安に限るか」

私が言うと、孝雄君とG君はエッという風に顔を見合わせた。あまりにも唐突だったので、二人は私が啤酒に酔っ払ったと思ったのかも知れなか

った。席を立てて行く人が、飲みさしのビール瓶を順番に置いて行くので、我々のテーブルにはビール瓶が林立していた。

責任上最後まで残るといふ美智子さんを説き伏せたのは、何処の駅を出た時だったかははっきりしないが、孝雄君と眠っていたM君を起こしてエスコート役に仕立てて、硬臥車へお引取り頂く。女性に殿を任せたのでは、男の拈券にかかわるというものである。

「王さん、俺達朝までここに居るから、もう呼びにこなくていいよ。君も疲れているんだ、早く休みなさい」

いささか酔いの廻ったG君は、そう言つて昂然と胸を張った。

「いいんですか、それで」

「いいとも！」

ためらう王さんに、G君はその頃テレビではやっていた言葉で答えて、ビール瓶を取り上げた。

その後、どんな話をして夜を過ごしたか、よく覚えていないが、歌手の北島三郎に似ているので、私が勝手に名付けたボーイ長のサブちゃんに揺り起こされた時、夜はすっかり明けていて、窓の外に拡がる空の碧さが、寝不足の目に眩しかった。何を言っているのか全く判らなかったが、どうやらテーブルをセットするので、しばらく席をはずせと言っているらしい。サブちゃんは窓際に置かれた鉢植えの草花に、水でもやるように飲み残しのビールを注ぎ、ついでに皿に残った醬油もぶちまけてニヤリと笑った。水気のある物はいつもこうして処分しているらしかった。

「中国の草花は、したたかに生きているんだなあ」

眠い目を擦りながら、G君はあきれたように呟いた。私も同じ思いであった。

朝食の後、案内された硬臥車は満員だった。全くのあなた任せだから、乗った列車が何処から何処

まで行くのかも知らなかったが、草臥れ果てた乗客の顔を見ると、長距離列車である事だけは確かであった。中にはもう何日も乗りづめで旅をしている人もいるに違いない。車内は進行方向左側が通路になっており、向かいあった鉄製の三段ベッドが一つのブロックを形成している。昔の国鉄の三等寝台車と大差はないが、最低のプライバシーを守るカーテンがないので、寝相の悪さを衆目に曝す事になる。公衆の大便所に囲いはおろか仕切りすらない大らかなお国ぶりの中国の事であるから、こんな些細な事は一々気にしないのかも知れないが、我々の感覚からすれば、やはりなにがしかの抵抗がある。

「お年寄のために、下段のベッドを空けておきましたからね」

向かい側の中段のベッドから、M君が首を突き出して言った。何と言われようと、この際横になれるのは有難い事である。マットの硬さも、脂光りしている枕も気にならなかった。

ひと眠りして起きると、列車は黄土の高原地帯を走っていた。と言っても、平坦な所ではなく、切り立った山肌を見せる丘陵の連なりである。億年を費して積み重なった黄土を、根気よく雨水が削り取ったものか、地震によって出来た断層なのか、微妙に異なる色合いの、殆ど無限とも思われる地層の重なりは、見ているだけで気が遠くなる。谷底は恐らく乾河道になっているのであろう。

気分はふっと、またしてもかの三国志の時代に紛れ込んでしまう。この辺りは魏国の版図だったから、蜀魏の軍が激突した記録は勿論ないが、はるか西の、長安（現在の西安）のそのまた西の五丈原、蜀の孔明と魏の仲達が秘術を尽くして一進一退の攻防を繰り返した五丈原も、ここと似たり寄ったりの地形なのであろうか。とすると、こんな所で三国志に書かれているように、自在に馬を乗りこなす事も出来たであろうか。五丈原により近いと思われる辺りは、真夜中に通過してしまつて、地形を確かめる事は出来なかったが、「こりゃあ、三国志の読み方を変えにゃあいかなあ——」などと独り

ごちてゐるうちに、写真を撮るのをすっかり忘れてしまっていた。残り少ないフィルムを惜しんだ事もあったが、あまりにも壮大なパロラマに心奪われて、カメラを向ける気持ちをなくしていたと言った方が当たっているかも知れない。

蟬時雨と真夏を思わせる強い日射しの出迎えを受けて、洛陽の駅に降り立ったのは午後二時過ぎであった。一気に季節が逆戻りした感じで、降るような熊蟬の声が暑さを一層増幅していた。

洛陽に関しては、私には一種の感慨があった。数年前、この「浄土」誌に「落日」と題した駄文を書かせて貰ったが、その中で中国・洛陽、インド・デカン高原、アメリカ中西部の街インディアナポリス、そして日本・伊豆高原と、四か国四か所の落日について触れたが、洛陽の落日だけは想像で、『洛』と『落』の文字の間にはさしたる関係はないそうだが、洛陽は夕日の都があった、と私は思いたいのである」と書いた。そもそもが編集者の散文詩をといて注文で書いたもので、散文詩になっているかどうかは甚だ心許なかったが、洛陽の文字からふくらませたイメージが、どこまで真実に近づき得たか、或は全く的是はずれであったか、日本を発つ前から気にかかっていたのである。あの時は洛陽の土をこの足で踏みしめようなどとは思ひもしなかったが、何か目に見えぬ糸に引張られてここまで来たようで、不思議と言えば不思議であった。

駅前には既に日本製のマイクロバスが待っており、如才ない若い男が早口でまくし立てて、我々をバスに乗せると委細かまわず発車させた。これが現地のガイドであった。てっきり宿舎の洛陽賓館へ直行するものとはばかり思っていたのに、着いた所は工芸館であった。

「また土産物の押売りですか」ホテルで一風呂浴びたいのに「そんな声がボソボソ囁かれる。ガイドに他意はないのであろうが、土産物店優先案内が一つのパターンになっていて、度重なると、ガイドにというか、ガイドを派遣している旅光社ヘリベートが支払われるのではと疑いたくもないが、それ

を望む日本人のツアーが多く存在するのも確かで、案内する側もそういう場所へ連れて行くのが最高のサービスと心得ている節がないでもない。

工芸館は書画骨董の模造から、刺繡、切絵、段通、籐細工、漆器等種々様々な工芸品の製作所で、展示場であり、また即売場でもあるが、何と言ってもこの目玉商品は唐三彩の複製品であろう。

唐三彩というのは、唐（六一八—九〇七）の都長安と副都洛陽の近辺で、貴族たちの葬礼のために特に作られた陶器の称で、死者が生前使用していた器具や動物などの模型を、黄、緑、藍、白、褐色などの鉛釉で華やかに彩った物で、製作時期は八世紀前半の約五十年ほどと意外に短い。時あたかも玄宗皇帝の治世、安祿山の乱（七五五）で都が荒廃し、貴族文化が衰退したのと軌を一にして作られなくなったという。言い換えれば、楊貴妃の死と共に唐三彩もその生涯を閉じた事になる。低温で焼くために、脆く実用には適さなかったが、西域の風俗を取り入れた物が数多く出土していて、当時の貴族社会がいかに西域の文物に憧れていたかが判ろうというものである。

昔は墳墓の副葬品だった唐三彩だが、現代では部屋の装飾品として蘇り、ここの工芸館では専ら馬が作られていた。若い女子工芸員がお喋りをしながら、左右対称の型から顔・首・胴体の部分を抜いて張り合わせ、これも型で抜いた四肢と尻尾、そして最後に耳をつけてから、水刷毛で継ぎ目の部分を修正すれば、あっという間に一頭の唐三彩馬の塑像が出来上がるのである。出来立はやはやの水分を含んだ濃い鼠色をしている物から、白っぽく乾いた物まで、床の上には同じ顔形をした大小様々な馬が、所狭しとばかりに並べ干されていた。自然に乾燥させないと、崩れてしまうのかも知れない。技法は唐代とそんなには変わっていないだろう。写実的な塑像に目を当てながら、蘭州の甘肅省博物館で見た、前漢時代に作られたブロンズ製の軍馬俑の姿を、私はゆくりなくも思い出していた。

（続く）

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』十月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

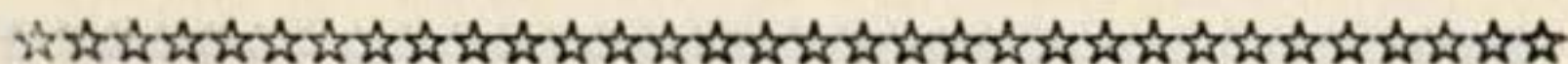
好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七



立ち止まるを善導

〈28〉



寺内大音

挿絵・松 濤 遠 文

風含む山陵

六

王権力と仏教について、いま少し触れておく。

釈尊滅後から西暦紀元の成立前後へかけての仏教がたどった足跡を回顧すると、多少の消長はあったがむむおね国家権力者の保護の

もと、育成され肥大化したと言える。この期間にはアシヨカ王、カニシカ王、またギリシヤからきたミリンダ王など王系は異なるが、いずれも強大な国王が出現し、内外からインドを統した。

しかしこれらの王はそろって仏教を信奉した。国教とさえする王もいた。思うに釈尊の教法が人種や部族の境界を超えて、人間共通

のもの"を説いていたからであろう。

権力の庇護に狎れると、教団は瘦せ衰えてゆく。權威の形式性だけを重んじ内容を疎外する。異を唱え合って、その權威の形式性を争うようになる。いわゆる小乗教と呼ばれる部派仏教がこんな土壤のなかで熟成されていた。

思想上から検討すると、インド土俗のヒンズーやバラモンの呪術修法がふんだんに仏教へ採入された。

釈尊の宗教思想はほんらい都市を中心としてひろがっていったものだ。対象となる信徒も貿易者や商人が多かった。当然、頭腦でこの思想を受容するようになる。

アシヨカ王をはじめ統一王朝となると、宏大なインドの国土だ。主体は農耕民ということになる。農耕民には古来から土俗信仰が根深く埋めこまれていて、これとの習合を仏教も回避するわけにはいかなかった。

ヒンズー教化した仏教が、やがてインドで

姿が見失われてしまった事實は歴史が示すとおりである。権力者に密着した宗教々団がたどる当然の運命かもしれない。

カニシカ王朝が衰退してゆく前後からその基盤だった西北インドから中央アジアへかけての広汎な地域に新しい仏教集団が芽生えてきた。般若思想を軸とした大乘仏教である。

新しい教団とは言うが、思想上からは"異"でも"新"でもない。釈尊がほんらい説いた人間教を復活させただけなのである。

王法権力と袂別した証因に、これらの大乘教団には階級差別がなかった。僧俗の違いさえなく、信徒のすべてを"菩薩"と呼んだ。戒律も部派仏教のように二百五十戒だ三百戒だという煩わしさはなく、せいぜい五十戒ぐらいで人倫の基本を守ることだけを求めている。

この大乘教徒たちのあいだで次々と經典が編まれた。もちろん全部が創作ではなく、インドですでに説かれた釈尊の教えが骨格とな

ってこれに肉附けをした内容が多かった。

その肉附だが、背景や風土がインドでは見かけられないものが混じりこんでいて、經典の成立場所をうかがわせて興味深い。

「法華經」もその例外ではなかった。その第十五に「從地湧出品」がある。

その時、他方の国土から沢山の求法者たちが集ってきて釈尊を囲んだ。「あなたが亡くなったあと、この娑婆世界でどんな經典を護持し、誦誦し、書寫し、供養したらよいのか、それを教えて下さい」と頼んだ。

釈尊は答える。「なぜお前たちは私の滅後をこだわるのか。私の足下には幾千万をこえるおびただしい求法者がいる。お前たちはその求法者たちに教え導かれればよいのだ」と突き放すように言った。

このとき突然、大地一面に大亀裂が生じた。そしてその割れ目から幾十萬億という求法者たちが現れ出た。彼らは金色の皮膚を持つており、顔は三十二の吉相でおおわれてい

た。

このおびただしい数の求法者たちは「法華經」の原文によると、

——先きより尽く娑婆世界の下、この界の虚空の中に在って住せしなり。この諸菩薩は釈迦牟尼仏の所説の音声を聞きて、下よりあらわれ來たれり。一々の菩薩は皆これ大衆の唱導の初めにして、各々六萬の恒河沙等の眷族をひきいたり。

——この諸菩薩、摩訶薩は地より湧出して、諸菩薩の種々の讃法をもつて仏を讃めたまつるに、かくの如くする時のあいだに五十小劫を運たり。この時、釈迦牟尼仏は默然として坐したまい、及び諸の四衆も亦、皆默然たること五十小劫なり。仏の神力のゆえに諸の大衆をして半日の如しと思わしむ。

——この菩薩衆の中に四の導師あり。一をば上行と名づけ、二をば無辺行と名づけ、三をば淨行と名づけ、四をば安立行と名づく。

この四菩薩は、その衆の中にありて最もこれ上首の唱導の師なり。

大地が割れる。震裂するのである。その裂け目からぞろぞろと求法者たちが這い出してくる。いずれも過去世において釈尊から教化された求法者たちだという。

こうした地中から湧き出る手法は第十一「見宝塔品」にもある。

釈尊の前におびただしい群衆が集いて説法に耳を傾けていたとき、突如として大地が裂け、そこから高さ五百ヨージュナ、七宝づくりの塔が地中から出現したのである。

この震裂する大地とはどんな処なのだろうか。おびただしい数の求法者を地底に抱え、大宝塔をのみこんでいる地層とはどんな場所であったのか。「見宝塔品」はこう描写している。

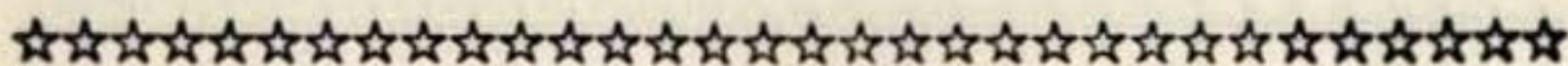
——そこには村落、都市、集落、州、王

国、首都はなく、カーラ山もムチリンダ山も、チャクラヴァーダ山も、マハーチャクラヴァーダ山もなく、須弥山もなく、その他の大山もなければ大海もなく、河川、大河川もなく、神や人間や、アスラの群衆もなく、地獄・畜生・ヤマの世界もないようにしつらえられてあった。

せせこましい人間社界から離脱した天地を想像させる。須弥山やそれを取り囲む高山を除外されるから地球外ということになってしまいが、これは仏教経典独特のデフォルメであろう。

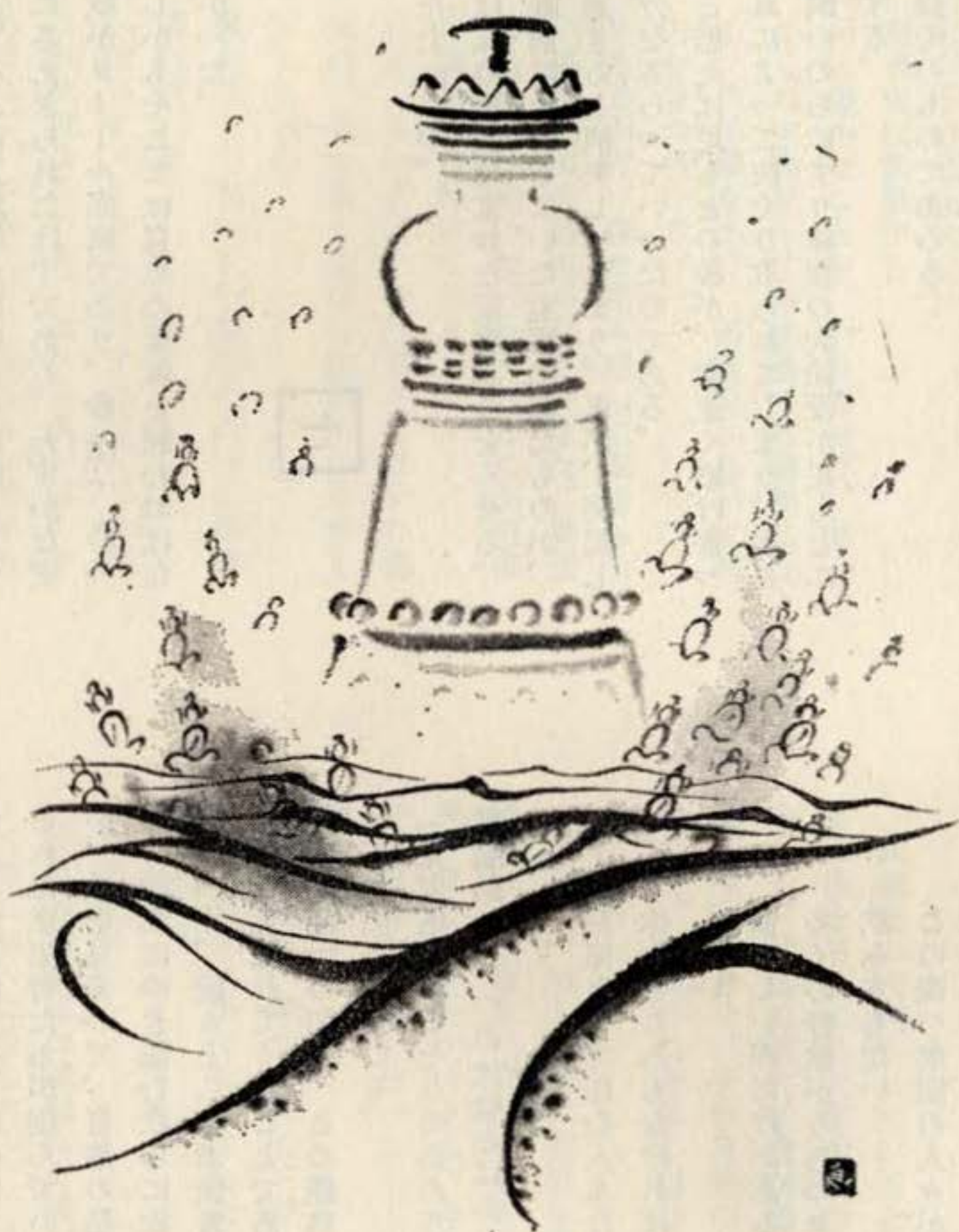
範囲をぐっと縮小して、砂漠が思いうかんで来ないであろうか。

当時の大乘教団は、中央アジアの砂漠地帯を流浪した「民」であったと推考されている。信徒が組織されても都市や街にいれば必ず部派仏教からの迫害を受けた。インド本国へ戻ればヒンズー教徒の餌食になってしま



幻

想



う。もちろん西方地域へはいりこめばユダヤ教圏にさえぎられたはずである。わずかな安全地域がタミール高原であり、砂漠であった。しかもそこでは自然の猛威と闘わねばならなかった。

七

砂丘上に立つ。

砂は風の悪戯で玄妙な変容ぶりをみせる。すぐ眼前にそびえていた宝塔に似たものが、一夜過ぎると消失してしまふ。風が、突起した部分をさらっていったのである。

かと思えば足もとの砂が、素速く駆け寄った疾風によって抉ぐり取られてしまふ。まさに一瞬ののちにすり鉢型の大陥没が足もとに現出する。

震裂そのものであろう。

おびただしい量の砂を吸いこんでゆく裂け目。あの奥底に虚空界が実在するのだらう

か。とすれば、そこに仏によって菩提を与えられた求法者たちが棲んでいるにちがいない。仏を見失って、自然の暴威にさらされて、砂漠にゆき悩む我らに救いの手をさしのべるべく、続々とこの求法者、菩薩たちが地上へ立ち現れてくることであらう。

「法華経」の幻想、この経典にこめられた願いがこめられている。

「見宝塔品」もそうであらう。また第七「化城喻品」も一つの比喻とばかりは言いきれず、

——荒涼として住む人もなく

休むところもなければ避難する場所もない

怖ろしい森だけがある

多くの野獣がうろつき

飲み水もない

この森へ集団の人々が到着した

荒れはてた森は五百ヨージャヤの広さで容易に通過することができない

集団の人々は指導者に訴えた

「私らはもはや疲れはてた。もう駄目だ。引き返したい」

指導者は激励する

「何と愚かなことを。引き返せば、せっかくの宝物をみすみす捨てる結果になる。さあ顔をあげ、両眼をひらいて前方を見つめなさい」

すると前方、森の繁み越しに素晴らしき塔が並ぶ大都市が見えてきた。集団の人たちは走った。いつのまにか恐怖の森を駆け抜けてしまった

だが、もっととはっきり見えるはずの都城は、森を通り抜けた途端にかき消えてしまった

疲れはてて坐りこむ集団の人々に指導者は言った

「汝らよ、まさに前進すべし。これはこれ化城なるのみ。我れは汝が疲れきわまして、途中で退き還らんと欲する

見を以て、方便力を用いてこの城を化作せるなり」

比喻として説かれているというが、このまま砂漠をさまよう大乘教団の人々にあてはめられる。砂丘の彼方に蜃気楼のような都城や堂がみえてきた。それ目的の仏国土はもうすぐだぞ、と疲れた身体に鞭打って歩きつづける。

砂丘一つ越した先に都城を置いたまま、集団の人々は最後の夜をむかえる。明朝はあの城へはいることができる。今夜はぐっすり眠って疲労をぬぐい去って……みんな楽しい夢を結ぶ。

だが翌朝、眼がさめて、砂丘に駆け登った人々は口々に叫ばねばならなかった。

「ない」

「消えた」

「昨日の黄昏には城壁に夕陽が映えてあんなに美しかったのに」

「はつきりと実在していたのに」

指導者は痛々しげに眺めやりながら

「さあ歩こう、今日も一日歩こう」

と励ますのである。

「どこへゆくんですか」

「きまっているではないか。仏国土を目ざすのだ」

「でもそれは幻影」

「いや……必ずいつか実物にたどりつけるんだよ。精進しよう」

これが「法華経」成立の状況と考えると大きな誤差はないのではなからうか。第十三「勸持品」ではくり返し「耐え忍ぶ」美德を強調している。第二十「常不軽菩薩品」では――。

この常不軽という名の菩薩は、説法もせず学も講せず、ただ通りすぎる出家者の誰彼かまわず呼び止めては、

「私はあなたを軽蔑しない。なぜならあなた方はみなボサツの道を修行し、仏陀になるからです」

相手は気味悪がって、

「なんだ此奴。頼まれもしないのに人を持ち上げくさって。これじゃ軽蔑するのと同じではないか」

と常不軽を罵り、はては投石したりをか泥ぶせたりした。それでも彼は、

「私はあなたを軽蔑しません」とくり返した。

常不軽菩薩は死の直前、空中から声で「法華経」を聞いた。正確にそれを理解し、仏陀になったという。

死の直前まで「法華経」を知らず、しかし他を軽蔑せず、素朴そのもので生きてきた求法者を物語ろうとする。これは一個人だけの問題ではなく、法華教団の消長を暗示する物語だったのではなからうか、とも推量できる。

釈尊の在世中、いやそれより以前からインドではすでに法華信仰らしきものが実在したようである。原始法華教団と呼ばれ、池沼で咲く蓮華を、いのちの象徴として崇がめてき

た。蓮華のうちで最高の貴種が白蓮華であった。

白蓮華こそ釈尊その人——この信仰が定着したとき、原始法華教団は完全に仏教教団の一翼をになうようになったのではあるまいか。有名な「拈華微笑」の説話におけるあの大迦葉尊者あたりは、この原始法華教団のリーダーだったかもしれない。

どんな逕路をたどり、どんな消長をたどったのか。それは不明だが、この法華思想がインドを遙か離れた砂嵐の地陵で再生したと考えられる。

やはり思想の根強さであろう。すでに白蓮華は釈尊に昇華されており、一片の花弁ではなくいのちの象徴——久遠の本仏となっていたのである。

砂漠に池や沼はない。蓮華は咲かない。久遠の本仏たる白蓮華は日輪に変じていた。「法華経」の「見宝塔品」が描写する塔上で輝く太陽神であった。多宝如来はこの光りに浴し

てふり仰ぐ大衆へこれを分かち与えるリーダーとなつてゐる。

また「從地湧出品」における地底から続々と浮上してくる求法の菩薩たち。

そこに水場の色香味を感じさせるものはない。「蓮根」から生え育った花弁ではなかった。求法の菩薩たちは地軸深く、虚空界にひそんできた植物とは無縁な「いのちの種子」だったのである。

インドにおける地方的な俗信仰が、大乘仏教のなかで育ち、鍛えられ、宏大な法華思想として見事に開花したと言える。

「法華経」の研究者たちは、經典の構造自体を複葉型でとらえようとする。二十八品にわかれる断章が同時代、同一作者によって書かれたものではないと断じている。宗教思想そのものもこれら時間空間の誤差が反映しているのではないか、とも言う。

ただここで強調できるのは、「法華経」思想がインドの原始教団期と後期大乘教団期と

法師を用い給いし陳主、六宗の碩徳を捨てて最澄法師を用い給いし桓武天皇は今に賢王の名て留め給えり。智顗法師と云うは後に天台大師と号し奉る。最澄法師は後には伝教大師と云う是なり。今の国王もまたかくの如し。現世安穩、後生善処なるべきこの大白法を信じて国土に弘め給わば万国にその身を仰がれ、後代に賢人の名を留め給うべし。知らずまた無辺行菩薩の化身にてやましますらん。また妙法の五字を弘め給わん智慧をば、いかに賤くとも上行菩薩の化身か、また釈迦如来の御使かと思うべし。

日蓮がその晩年（建治三年）に身延山で書いた「法華初心成仏抄」である。「法華経」を信奉したインド、中国、日本の各国王に触れている。

ここに注目すべき文章がある。

「……今の国王またかくの如し現世安穩、後生善処なるべきこの大白法を信じて国土に

弘め給わば万国にその身を仰がれ、後代に賢人の名を留め給うべし。知らずまた無辺行菩薩の化身にてやましますらん」

文末の無辺行菩薩とは誰か。「法華経」の「從地湧出品」で大地が震裂し、そこから続々と浮上してくる求法者たち。彼らには四人のリーダーがいた。その第二番目が無辺行菩薩なのである。

ではその最上席を占める菩薩は誰なのか。「法華初心成仏抄」の文章はすぐにそれをフオローする。

「……また抄法の五字を弘め給わん智者をば、いかに賤くとも上行菩薩の化身かまた釈迦如来の御使かと思うべし」

この上行菩薩こそ湧出してきたおびただない数の求法名のリーダー。その最上席を占める菩薩であった。妙法の五字を弘め給わん智者をば、いかに賤くとも上行菩薩の化身か……云々とあるようにこれは日蓮自身を言いついてある。妙法の五字を弘布していること

まわったが、そこで寝ついたきり遂に起たなかった。十月十三日 入滅、六十一歳であった。

遺骨は同じ月の二十五日、身延山へ運ばれ廟所をつくる。その墓守りを六人の高弟が交代で勤めることになる。日興もその一人だった。

ところが日興は他の五人を排して墓守りの独占をはかる。日蓮の遺法を正しく継承したのは自分以外にいないという自覚からだった。当然、他の五人(本弟子)たちと対立するようになる。

前掲の文章も「五人所破抄」からの引用である。ただし日興自身の筆によったものではなく、弟子の日順が嘉暦三年七月に書いた。

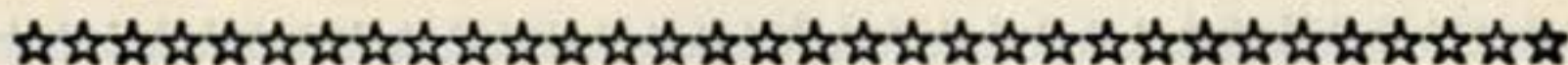
この日興を先達とするのが「富士講」であって、池上(本門寺)側の圧力で身延山を去ったが、富士山麓に大石寺を建立、いくたの消長を経ながら日蓮正宗を呼称した別流である。

つまり日蓮が自ら上行菩薩の生まれ替りを呼称したという説は、主としてこの「富士講」系から強調された形跡が濃厚である。そして「王法為本」的な戒壇設立にも同じ道筋を感じさせる。

三大秘法の大眼目である戒壇の設置だが、勅命を得て国立の戒壇を設置するという。勅命を得てとは、すでに王法が優先であって、この戒壇が王権の道具となることは明白であろう。

——隠岐の法皇(後鳥羽上皇)は天子也。権ノ大夫殿(北条義時)は民ぞかし。子の親をあだまんをば、天照太神うけ給いなんや。所従が主君を敵とせんをば正八幡は御用いあるべしや。

日蓮は「種々御振舞御書」で言いきっている。彼の生誕時に発生した承久ノ変に触れているのだ。日蓮の王法が明確に天皇制を護持



する神道であつたことを物語る文章だ。

だが日蓮の言説は生涯、激しくゆれ動いて
いる。

例えば第一次蒙古襲来ときは(文永ノ役)
国防への団結を強く呼びかけておきながら、
第二次(弘安ノ役)となると、「こんな日本なぞ
滅んでしまえ。元の軍隊こそはこの穢土にま
みれた日本国を叩き直してくれる仏の使者、
義軍だ」とまで言い放つ。弘安ノ役は元軍の
惨敗に終るわけだが、日蓮の反応は「あたっ
たり、あたったりや」と予言的中を手放し
で悦んでいる。何の予言的中なのか、誰にも
わからない。

王法為本と言っても日蓮は単純な天皇崇拜
者でもない。きびしい条件付きで、その君主が
法華信者にならなければならぬのである。

この混乱が門弟たちにさまざまな考え方を
遺したと言える。

“富士講”の日興は大石寺にこもり、池上
本門寺以下の本弟子五人の主流派をきびしく

批判し続ける。その「日興遺誠置文」は箇条
書きで示しているが、適宜にひろいだしてみ
ると、

- 一、富士の立義聊も先師(日蓮)の御弘通に
違せざる事
- 一、五人の立義一々に先師の御弘通に違す
る事
- 一、御書いずれも偽書に擬し、当門流を毀
謗せん者これあるべし。もしかやうの
悪侶出来せば、親近すべからざる事
- 一、謗法と同座すべからず、与同罪を恐る
べき事
- 一、刀杖等においては仏法守護のためにこ
とを許す

謗法者との闘いには刀権、武器の携行もあ
えて辞さないと厳命している。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 十月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年九月二十五日 印刷

昭和六十一年十月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八―八二一八七番

待望の新刊

………毎日新聞社刊………

寺内大吉 著

『沢庵と崇伝』上、下（全二冊）

——黒衣はためく日々——

たくあん漬けで名を残した沢庵と……

この国の官僚の原型となった崇伝……

上巻二六二ページ 下巻二九二ページ

A5判上製 定価 各一、二〇〇円

〈発行〉 〒100 東京都千代田区一ツ橋 毎日新聞社

第五十二巻 十月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和六十一年九月二十五日印刷 昭和六十一年十月一日発行